

# 秋野豊ユーラシア基金 ニューズレター

2001年10月1日 第4号



秋野豊ユーラシア基金

〒151-0061

東京都渋谷区初台 2-24-1-205

Tel/Fax 03-5350-3932

website <http://www.akinoyutaka.org>

E-mail [info@akinoyutaka.org](mailto:info@akinoyutaka.org)

郵便振替 02740-2-3000

## もくじ 第4号

「おいしいものを食べよう」 秋野洋子..... 1
第3回 秋野豊賞受賞者決定..... 1
審査委員長の講評..... 2
受賞者のことばと研究計画の概要
金敬黙..... 2
渡辺信..... 4
第3回秋野豊賞授与式..... 3
「秋野豊ユーラシア基金の多彩なサポーターたち」
第1回 柳沢勝(丸勝 魚長食品)..... 5
リレーエッセイ 秋野氏の思い出 第3回
秋野先生は僕達に化学変化を
起こす catalyst だった..... 7
事務局からのお知らせ・編集後記..... 8

## 第三回秋野豊賞 受賞者決定!!

第三回秋野豊賞の応募受付は5月2日(水)に締め切られました。応募総数は大学院生部門5名、大学生・一般部門1名の合計6名でした。応募者の内訳ですが、大学院生部門では国内から4名、海外(イギリス)から1名となりました。調査対象地域もますますバラエティーに富んでおり、中東、ウズベキスタン、ロシア、カンボジア、セルビアなどになっていました。一方、大学生・一般部門の応募者はコンゴの民族問題をとりあげていました。

審査委員会はこれらの応募書類について、約3週間をかけて厳正な審査を行った結果、大学院生部門で2名の方が最終候補者となり、理事会の承認を経て6月1日付で受賞決定となりました。

なお大学生・一般部門は該当者なしに終わりました。

## 「おいしいものを食べよう」

秋野 洋子

この3年間苦しいときや何か行きつまったとき、私たち家族の合言葉は「おいしいものを食べよう」だった。おいしいものを食べたときの幸福感を、問題に立ち向かう新たなエネルギーに変えるのだ。それは秋野が私たちに残してくれた数々の習慣の一つなのだが、中でももっとも愛らしいものかもしれない。

秋野は実においしそうに食べ物を食べる人だった。ほっぺたをふくらませ口のまわりを油で光らせるので、私はよく「もっと上品に食べてよ」と言ったものだが、今となってはその顔がこの上なく懐かしい。同じ物を食べていても秋野と食べるとうれしかった。「うまい」「激しくうまい」という言葉につられて娘たちは何でも食べるようになった。彼女たちの食わず嫌いについては、「君たちは通じやないなー」とあきれた顔をしてみせたりした。

その結果、プライドを傷つけられた娘たちはまんまと策略にはまりお皿に手をつけるのだった。反対にお刺身やステーキなど好物が食卓に上がったときは、わざとまずい顔をして「まずい!! こんなまずいものはみんなには食べさせられない」と言ってほおぼり続けるのが常だったので、娘たちの方がパパの冗談を楽しんでいるという風だった。

秋野は我が家で食事作法は傍若無人の感があったが、外での子供たちの食事作法には少し厳しかった。上の娘が9歳、下の娘が4歳のころ、フランス料理のお店に連れて行ったことがあった。小さい子供づれの方はご遠慮下さいと言われたのだが、「家の娘たちは大丈夫です」と自信に満ちた態度で秋野が言ったので、しかたがなくお店に入れてくれた。

娘たちは二人とも緊張して背筋をピッと伸ばしていすに座った。娘たちの顔からはパパの期待に応えようという思いが滲みでていたし、パパの顔には娘たちへの信頼感があふれていた。

食事が終わって帰るとき、お店の人に「失礼しました。りっぱなお嬢さんですね。」と褒められたときの鼻高々の父と娘たちの光景は忘れられない思い出になった。

最近子供が小さい家庭でさえ一緒に食卓を囲むことが少なくなっているらしいが、とても残念なことだと思う。親が子供にして上げられることはそんなにはない。何か困難な場面や辛いことに出会ったとき、遠い記憶の中の言葉を幸福感とともに思い出すことができれば、窮地から抜け出す力になると思う。

事件直後しばらくの間、食べ物を口にするたびに、ほとんどコミカルなまでに私の目からぼろぼろと涙があふれでた。

今はもちろんそんなことはなくなって、三人の食卓にはただ昔と変わらぬ幸福感が漂っているのである。

## 審査委員長の講評

審査委員長

木村 汎（国際日本文化研究センター教授）

毎年この時期が近づくと、公平・厳正な審査を行うことができるように、心身ともに健全な状況を備えようとしている。応募者の提案内容を注意深く熟読することは、緊張した時間を連続的に要する大作業である。私にとり、これほど真剣に他人が書いた文章（申請書類）を読むことは、おそらく他にあまりない。しかし、過去3年間、このような苦労は十二分に報いられている。応募に値する真剣な提案に遭遇するばかりか、可否の結果如何にかかわらず、提案内容によって研究上也教えられることが大であるからである。おそらく秋野豊氏も、自身が撒いた種子が、後進の人々によってこれほどまでに確実に受け継がれていることは、予想外のことではなからうか。秋野氏ははじめた仕事は、確実に生きている。

今は、第三回秋野賞の審査を無事終えて、静謐な喜びにひたっている。応募者の質が、年々確実に高くなってきていることを確実に感じる。今回の応募は、この他水準が高かった。審査は、四項目について一項目各5点を満点とし、意図的に個人差が浮き出るように審査員の各先生方をお願いしているにもかかわらず、全員の審査員がすべての応募者に高い点をつけていた。

審査員5名の合計点では、渡辺信氏が文句なしの第1位。第2位は、金敬黙氏。審査中は、もちろん応募者の氏名、性別、年齢、所属その他が一切伏せられ、記号名A、B、C、D...で記されているだけなので、渡辺氏が昨年に続く2度目の応募で栄冠を獲得したことは、ただ今事務局から教えられ知った次第。また金氏が在日韓国人であることも、講評を記す現段階で初めて知った。同氏が在日韓国人の方だからといって、たしかにどうということはない。だが、秋野賞の受賞者に国際色が加わることには、喜びを禁じえない。

「大学院生部門」と比べると、「大学生・一般部門」は毎年応募の数も少なく、質的に必ずしも充分でない。今年も該当者を認めえなかったことは、残念至極。これら二部門に分けて募集することの是非が、今後の検討課題となるかもしれない。

## 受賞者のことばと研究計画概要

金敬黙（キム・ギョムク）

「紛争地域における市民社会の役割と責任

- ユーゴスラビアを事例に -」



受賞のことば

この度、第三回秋野賞を受賞することをお大変光栄に思っております。「とてもうれしいです。」ということばに私の気持ちがすべて込められております。未熟なプロポーザルを認めてくださった審査委員の諸先生とユーラシア基金、秋野先生のご家族の皆様様に改めて深い感謝の念を申し上げたいと思います。

しかし、この喜びは、プロジェクトを実施できるエントリーポイントに立てたことの喜びであり、決して秋野賞の受賞で満足してはいけないうことを十二分存じ上げております。今でも地球上のいたるところで戦闘が行われておりますし、仮に「紛争」という形で暴力が現れないとしても、多くの人々は暴力の状況に晒されていると思います。そのことを踏まえて、ユーゴスラビアをはじめ暴力に晒された人々の平和を取り戻す作業関わって見たいと思います。そして、そのようなチャンスがこのたび与えられたことが何よりうれしいのです。

今が出発点である以上、私のこの喜びは、プロジェクトを無事に完成させたときに終わることであり、より厳密に申しますと、プロジェクトの対象となる現地の市民社会や人々が自ら「安心して暮らせる」と認識できたときに初めて最終ゴールにたどりつけるものだと思います。そのことを考えるとこのプロジェクトは大変長い歳月と努力が求められる難しい作業であり、その責任も重いものであると思いますが、だからこそ積極的に頑張っていきたいと思っております。

私はこのプロジェクトを通して俗に云われる「バルカン」はヨーロッパの火薬庫である」という歴史的命題に市民社会の立場から逆らおうとしております。歴史の流れを変えることは、決して簡単でもありませんし、外部者にできることではないかも知れません。しかし、平和をめざす人々

の努力がそこにある以上、その努力を些細な力ではありませんが外の市民社会や人々も支える当為性はあると思います。そして、そのような草の根の努力が互いにリンクしてはじめて新しい可能性が見えてくると考えております。過去には重視されることのなかった、個々人の多様な価値が尊重される空間を目指して今後頑張りたいと思います。ありがとうございました。

#### 研究計画の概要

本プロジェクトは、ユーゴスラビアの政権側とは一線を画し、民主化や平和問題に取り組んできた現地市民社会（主に、NGO、独立メディア、学生運動組織等）の役割と責任を明らかにすることを目的としている。

国際社会は、ユーゴスラビア（特に、セルビア）を「悪玉」としてきたが、市民社会の視点から捉えると、セルビアは「一枚岩」ではなく、制限はあったとしても多様な議論がそれなりに行われてきた。中でも、NGOや社会（学生）運動を急進勢力とする市民社会は、権力の抑圧に屈せずに紛争の原因や責任を追及しながら、民主化や多文化・多民族の共生を目指す活動を展開してきた。

したがって、本プロジェクトの目的は、現地の市民社会が取り組んできた、平和運動、社会運動に関連する活動の役割・貢献を明らかにすると同時に、現地市民社会の紛争当事者（加害者側でありながら被害者側でもある立場）としての責任を考察するためのリサーチである。

同時に、外部者の観点から、現地市民社会との協力を模索する基準として、緊急救援・紛争解決・平和問題における経済至上主義的、または垂直的援助の実施という視点を克服しながら、紛争後の社会において、人々が安全に暮らせる環境を作るために市民社会に期待される役割と責任を水平的なパートナー関係として模索・実施することである。そのためにも、ユーゴスラビアの問題を「相対化」し、他の紛争地域（具体的には、中東地域や北東アジア問題等）への教訓としたい。

特に、このプロジェクトは、紛争解決・平和研究で多く見られる、国際機関、各国政府が中心となる国家間の利害関係に関わるアプローチではなく、非暴力的価値を求める市民社会を中心的なアクターとして捉えることである。

調査／研究の実施は、セルビア共和国とモンテネグロ共和国の現地にて調査提案者が直接実施する予定である。調査の具体的方法は、現地担当者の証言や文書化された1次、2次資料を中心に捉えると同時に、現地の市民社会とワークショップやセミナーを開催することから、

### 第三回秋野賞授与式

7月7日（土）午前10時30分より、独立法人代々木オリンピックセンターにて第三回秋野賞授与式が行われました。

授与式ではまず秋野洋子代表の激励の言葉が述べられたあと、賞金の授与が行われました。次いでやや緊張気味の二人の受賞者（金敬黙・渡辺信）から決意と抱負が述べられました。

その後の昼食会でようやく二人は緊張が解けたようで、出席した理事・事務局員らと約2時間近く懇談をしました。

お二人の今後の活躍に期待したいと思います。

ユーゴスラビアにおける紛争問題や民主化に関するものを市民社会の視点から批判的に分析する。

現地の市民社会が過去10年間続いた旧ユーゴスラビア紛争とコンゴ紛争をどのような視点から捉えているのだろうか。また、ユーゴスラビアの人々は今後、どのようにこの地域の紛争を解決し、平和というゴールに向かっていく努力を行うのだろうか、という問いに関して様々な視点からの意見・情報を収集し、分析してみたい。

本プロジェクトの実施を通して期待される効果・成果は、以下の通りである。

市民社会の立場から民族または宗教による紛争の原因分析を行うと同時に紛争解決（和平合意や暴力の停止期まで）やその後の諸活動を分析する。

特に、民主化、紛争解決、社会開発、融和等の問題を市民社会の視点から見直す。

ユーゴスラビアの問題を「相対化」することを試みることから、その他の地域（特に北東アジアや中東情勢）への教訓とする。

外部者（国際機関、政府機関、軍隊、市民社会等）が「介入」をすることによる、正のインパクトと負のインパクトを見ることから、より良い支援（Good Practice）のための教訓として、国内外にて市民社会の立場として調査分析、政策提言を行う事例に活用したい。

渡辺 信

「ウズベキスタンにおける『多民族共同体』と『国民国家形成』の問題」(仮題)



受賞者のことば

2回目の挑戦で受賞することができ、うれしさも2倍です。学部生時代にウズベキスタンへ交換留学生として行って以来、これまで勉強を続けてきました。今回、私が受賞できたのは、ウズベキスタンの友人たちとの交流を通じてたくさんの勉強をさせてもらい、諸先生方からも貴重な助言をいただいていたからだと思います。

これからもそうした関係を大切にしながら自分の視点を確立させ、多くのことを吸収し、研究に生かしてゆきたいです。秋野賞受賞者として今後もさらに努力してゆこうと、気持ちを引き締めています。

研究計画の概要

私が関心を持っているのは、独立後のウズベキスタンにおける「多民族共同体」と「国民国家形成」との関係であり、全人口に占める割合の高さと共に、国家の名称民

族(基幹民族)となったウズベク人を中心に据えた「国民国家形成」と、その「多民族共同体」を構成するその他の民族との関係であると言える。つまり、ソ連崩壊という社会変動を経験し、「多民族共同体」と「国民国家形成」という矛盾する現実の狭間で、「国家」と「民族」はどのように相互に影響を及ぼすのか、あるいは、その相互関係の限界はどういったものなのか、といった問いを抱いている。

こうした問いに対して、私は、国際社会学的アプローチ、また、ナショナリズム論やエスニック問題に関する方法論の勉強を継続しつつ、これまでの研究者によって明らかにされてきた内外の研究成果や文献等の資料を用い、ソ連の民族及び言語政策との関連に注意を払いながら、同時に、独立後のウズベキスタン政府による諸民族政策に注目し、「秋野豊賞」の基本的な趣旨に従い現地調査を行う。

私は、現地でのアンケート調査の結果により、あらかじめ予想されている「少数民族は不利である」といった結論に対し、留学時代から感じてきた私なりの感想を保持しながらも、「個人」としての人々の日常生活におけるミクロな視点のレベルを大切に、実際に具体的な声を集めながら、いわば「公」ともいえるべき「国民国家形成」との関係性を冷静に分析したい。こうした作業は、強力な権威主義体制の下、言論統制の厳しさや政治的無関心の増幅により、「民族」や「国家」といったデリケートな問題が人々によって正面から議論される機会が減ってきている現状においては、それだけ困難も予想される。しかしながら、注意深く地道な聞き取り調査を実行することで、多民族社会の実態と、人々がどれだけ「ウズベク化・国民国家形成」からのインパクトを受けているのか、あるいは、社会はどのような問題を抱えているのか、多くの事柄が明らかになる可能性がある。さらに、現地調査の際には、人々と交流する中で、何気なく発せられるであろう示唆に富んだ言葉も大切に記録するほか、文献収集も日常的な活動とする。また、ウズベキスタンの民族政策の一端を担う「共和国民族文化センター」や各民族の文化センターなどの公的機関も訪問し、少数民族の文化活動の状況と国家による位置付けを調査する。

ソ連崩壊に続く独立から10年を迎えようとする今日、民族間関係をめぐって非常に錯綜した状況が続いていると言われるが、上述した私の問いに対し、一連の「ウズベク化・国民国家形成」が、実際に一般の人々、特にウズベク人以外の民族にとってどのような影響を与えているのかを具体的に明らかにし、現実に即した的確な分析を行うことが研究の目的であると言えるだろう。

『ユーラシアの平和と紛争』 vol.1, 2001



秋野豊賞調査報告書『ユーラシアの平和と紛争』創刊号が刊行されました。

創刊号は第一回秋野賞受賞者の森田太郎氏、小山淑子氏、湯浅剛氏の三名の調査報告書と会計報告書が掲載されました。

会員以外で入手をご希望の方は、秋野豊ユーラシア基金事務局までご連絡下さい。

## 『秋野さんの志を思い風化させまじと願う』

函館 丸勝 魚長食品(株) 柳沢 勝 社長へのインタビュー

秋野豊ユーラシア基金 理事 吉岡 亨

## 1. はじめに

「秋野豊ユーラシア基金」の広瀬事務局長から大口寄付についてのメールを受け取ったのは、今からおよそ1年前の平成12年6月26日のことでした。メールの内容は次のようなものでした。

『...なお大口の寄付としては、もう一つ函館のマルカツ興産をあげなければなりません。この会社は函館の会社なのですが、社長さんが事件直後から関心をお寄せ下さり、お店に寄付・献金箱を置いて下さっているようなのです。それで不定期に(そうですね三ヶ月に一回くらいの割合でしょうか)送金をして下さっています。...以上については代表の秋野洋子さんにお願いしてお礼状を書いていただきました。...』

その後、広瀬事務局長がインターネットでりんごジャムを購入しようとした際に、偶然「マルカツ興産」のサイバー店を利用することとなり、そんな奇縁もあって、当基金「ニューズレター」でご紹介し改めてお礼を申し上げるためいつか函館取材にお伺いしてはどうか、と事務局長提案されていたところでした。

札幌在住である私が一番函館に近いことから早くお伺いしなければと思っていたのですが、家族への日頃の行いの罪滅ぼしを兼ねて、北海道に遅い春がやって来ようとしていた4月末、家族とともども1泊2日の函館取材旅行へ出発しました。

( \*個人の免罪旅行?であることから、当基金からの支出は伴わないことを念のため注記しておきます。 )

## 2. 丸勝(マルカツ)魚長食品(株)の概要

函館に着いた日の翌日が取材の約束の日であったことから、その日は函館名所巡りへと出かけました。

函館は函館山を始めとする観光名所の宝庫なのですが、まずは五稜郭タワーへ登りました。タワーの眺望から足元へ目を移すとおみやげやさんが軒を並べているのが見え、その一つに「丸勝魚長食品」とあるのが目に入りました。さっそくそのお店を訪れ宣伝パンフレットを手に入れました。

パンフには、

シーフード&マーケット「はこだて海鮮市場(1~3号館)」

スーベニア&レストラン「函館西波止場」

港のカフェテラス「函館西波止場式番館」

函館ガラス&オルゴール「はこだて明治館」

函館山の地下水100%「はこだてビール」

ペイクルーズ「ブルームーン」

ホテル函館ロイヤル

ホテルロイヤル柏木

スパビーチ&ホテル「海王館」

などの事業の宣伝が書かれていて、多角的・本格的な事業の数々に最初は函館ベイエリア全般に付いての一般的なパンフレットと錯覚するほどで、全てが「丸勝魚長食品」の事業パンフレットとは気付きませんでした。

これは大した会社だな~(失礼!?)と本当に感心してしまいました。

## 3. 募金箱の感動

パンフに誘われるまま函館ベイエリアを訪れてみることにしました。昔のレンガ造りの倉庫群を改造し一大観光・ショッピングスポットとなったベイエリアには、パンフレットそのままに「丸勝

魚長食品」のお店があり、その一つである「明治の館」の入口には、オルゴール館もあることからオルゴール人形が置かれていました。

何気なく見ていたのですが、次の瞬間私は思わず立ち止まり、目がそのままオルゴール人形に釘付けになってしまいました。そのオルゴール台には、「秋野豊ユーラシア基金」の募金箱が置かれていたのです。

「秋野豊ユーラシア基金に御協力お願い致します。...ユーラシアへの貢献者を育てる為に募金に御協力お願い致します。」

こんなに立派に刻字された銘板と募金箱がお店の前に置かれているとは...何もお願いしないのにこんなにまでしていただいている...そう思うと素直な感動が湧き上がり、本当に涙が出るほど感激しました。あの時の思いは忘れることが出来ません。



## 4. 柳沢社長へのインタビューの概要

翌日約束の時間に会社へお伺いしました。

会社の入口の社員用掲示板には、五稜郭タワーの下のお店にもあったのですが、社訓的なスローガンが貼ってありました。「つねに生き生きした行動で充実した仕事を目指せ代表取締役 柳沢 勝」オルゴール人形の募金箱とあいまって、柳沢社長の人柄を想像させるのに十分なインパクトを感じました。

その横には、当基金代表 秋野洋子さんからのお礼の手紙が貼ってあり、当基金への活動に会社ぐるみで取り組んでいただいていることがうかがえました。

また、日経新聞による柳沢社長の人物紹介記事も貼ってありました。記事の内容は、函館活性化に奔走するやりのビジネスマンであり、ベイエリア再生の大立者であるというようなものでした。



入口のドアを開けると、社長を始めとして居合わせた社員の方々が温かく迎えてくれました。こうしていよいよ柳沢社長からお話を伺うこととなりました。

実際に柳沢社長とお話してみると、想像していたとおり、優しさの中にも経営者としての厳しさを押し包んだジェントルマンという感じを受けました。

当基金へ寄付し続けていただいているのは、「秋野さんのことを知って欲しいとの思いから」ということでした。

「こういうことは一時期騒がれてもすぐ忘れ去られてしまう。それを一日でも延ばしたい。社員にも忘れ去ることの無いよう啓蒙していきたい。私たちの郷土である北海道に世界のために役立ちようとした秋野さんのような立派な方が居たんだということを忘れてはならないと思う。北海道の誇りです。」と話される柳沢社長。

豊さんとは一面識もなく、新聞報道等で初めて知り、「何か自分でも役に立つことができれば」との思いで募金を始められたとのことでした。

「為さなければならぬことを率先垂範してやられた。その意義を私たちに示したいとご理解して欲しいなどとは考えていなかったと思う。世界のために何が出来るのか

ということを自ら考え自ら行動しただけ。私たちがそれを理解して続けていくことに大きな意義があると思う。」



「自分だったら出来るかどうか...とても勇気の要ることだと思う。秋野さんが世界のために貢献しようとしたように、自分も自分を育てた函館のために役立ちたい、何かを還元したい。函館のために何が出来るか常に考えている。」小泉首相と同じ昭和17年生まれ、首相に負けまいと頑張りたい、函館の益々の活性化のために精一杯取り組んで行きたい、とバイタリティー杯にお話しいただきました。

インタビューを通じて強く感じたのは、「秋野さんの志を想い、秋野さんのことを風化させてはならない」という気持でした。

私たち「秋野豊ユーラシア基金」の運営関係者と同じ思いで協力いただいている方々がいる。豊さんの気持ちを思いその継続を支援いただいている方々がいる。豊さんのはにかむ顔が目につかびました。柳沢社長へのありがたさで胸が一杯になると同時に私たちへの温かい励まし気持も感じたのでした。

## 5. おわりに

観光客が多く本業がお忙しいゴールデンウィークに、取材の時間を割いていただいた柳沢社長はじめいろいろご案内いただいた吉見課長、ご迷惑をおかけしたその他社員の皆様に、この場を借りて改めてお礼申し上げます。取材の大役には役者不足にて、当基金からの感謝の意が十分に伝えられたかどうか不安ではありますが、快く応じていただき本当にありがとうございました。

この取材を通じて改めて思い知らされたのは、この様な同じ思いの多くの会員の方々に支えられて当基金が運営されているという事実です。心から感謝するとともに、その責任の大きさ・重さが改めて強く胸に刻み込まれました。

会員の皆様一人一人のこの様な思いに応えることが、豊さんの魂の思いに応えることになると強く感じました。

家族の慰安を兼ねた取材旅行ではありましたが、私自身にとっても、オルゴール館の人形 アンクルオルゴとの思いがけない出会があった、忘れることの出来ない取材旅行となりました。

(個人的なことながら家族ととも「ブルームーン」に乗せていただいたことを正直に告白し、この場を借りて改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。)

## 第3回

## 『秋野先生は僕達に化学変化を起こす catalyst だった』

浅野 茂生

(筑波大学国際関係学類 1988年卒、現 NKK 勤務)

catalyst: 化学反応に際し、反応物質以外のもので、それ自身は化学変化を受けず、しかも反応速度を早める物質

あの年、東京国際フォーラムでの「偲ぶ会」は、先生を喩えるとても素敵な言葉で溢れた。奥様と二人を称して「セントバーナードとコリー」。ロシアでぬかるみにはまったジープの脱出の助けとなった「硬い石」、そして「電光」。この全てが先生を象徴する素晴らしい喩えだった。

そんな先生を僕は「触媒 catalyst」の様に思う。先生が行く所、いつも停滞していた何かが化学変化を始める。そんな印象がとても強い。

バラバラな何かがそれに触れる事で激しく化学反応を始める、しかしそれ自身は決して変化しない。秋野先生はそういう方だった。

1987年10月23日。授業に出るよ先部屋で本を読んでいた、夕方になるとクラブの練習に出かけるといった自堕落な生活をしていたあの頃。学食の前で、先生に偶然出会った。満面の笑みをたたえて先生は前方からやってきた。

「アサノさん。」

先生は僕達を呼ぶ時でもいつも「さん」づけだった。「見て下さい、できたての論文ですよ。よかったら、読んでみて下さい。ここにサインしておきますね。」

そう言ってコピーにすらすらとサインを書いて僕に手渡すといつものように悠然とした足取りで研究室の方へと歩いていった。

今、手元にあるサイン入りの論文のコピー。

浅野学兄 23/10/87 秋野豊。

「ゴルバチョフの国内改革と東欧ブロック」(ソ連研究 No.5) 手書きで 10/27 発行の意の書込。

決して真面目な学生とは言えなかった僕に、何故先生がコピーを渡して下さったのかは未だに分からない。もしかすると、最初に出会った誰でもよかったのかも知れない、あるいは次々と学生皆に配って下さっていたのかも知れない。でもその時は、自分だけに宝物を頂いた様な気がして、ただひたすらとても嬉しかった。

それが本当に宝物になってしまう日がくるとは知らず、学食でそれを読んだ僕は、感想も伝える事なく、ノートに挟んだまま、やがて卒業してしまった。

あの日、訃報を聞いた時、本棚の奥からノートを引っ張り出した。色褪せたブルーの万年筆で書かれた先生のサイン。不真面目な生徒に過ぎなかった僕にまで「アサノさん」と呼び掛け「学兄」と気軽に書く、そんな先生を思い出し、サインが滲んで見えなくなった。

その時、何かが僕の中で化学変化を起こした。夢中でパソコンを叩き、ホームページに先生の思い出を綴った。(http://www.mars.dti.ne.jp/asanos)

昨年末、このホームページを見て、一人の女性がEメールをくれた。「秋野先生と日本に帰る飛行機の中で出会い、訃報を知り、北海道へ出掛ける機会があるので是非、お墓参りをしたいが連絡先を教えて欲しい」とのことだった。

秋野先生のことをホームページに載せながら、実は奥様にも偲ぶ会の一般参加者としてしか御挨拶をしたことがない。ましてや御自宅などお邪魔した事もない僕にとって、頼りは北海道出身同期のH君とユーラシア基金の広瀬さんだけだった。

そこで早速H君にアドバイスをもらい、広瀬さんにEメールで連絡を取り、手筈を整えて頂いた。

(実は、広瀬さんにもお会いした事がないのだが...)

こうして、僕の中に起こった化学変化が、たまたま一人の女性にも影響を与えることになった。

以下は彼女が北海道を訪れた後に下さったEメールの全文である。ご本人の許可を頂きここに掲載させて頂く。

11月18日に、札幌の秋野邸にお邪魔させて頂きました。事務局の広瀬様より、「豪快な秋野氏をあたたかく包み込んでいた人」とのメールを頂いていたので、なんとなく、「日本の母」的な、ふくよかな女性を想像していましたが、出迎えてくれたのは、ほっそりとした笑顔の美しい方でした。

思えば、氏の生きたワールドワイドな世界とは縁もゆかりも無い私が、ご自宅までお邪魔させて頂くこととなったのは、数年前に、日本に帰る飛行機の座席が隣り合わせになったことがきっかけでした。

初めての一人旅の海外旅行でイギリス・フランス・イタリアと廻って来た私に、モスクワ空港から乗りこんで来た国籍不明の男性が秋野氏でした。

エコノミーの狭い座席に根を上げる私に、大きな体躯を折り曲げながら「ああ、快適だ-!」と言ってにっこりしていた氏の旅は、旧ソ連邦の国々の様子をその目で見てくることだったと記憶しています。

氏の話す全くの「ドキュメント」は、戦場など映画でしか知らない私には衝撃的の一言でした。私の旅した美しい西洋の、陸続きに戦地がある。恐怖というよりは不思議な感じがしました。そこから戻って来た氏だけが、確かな証拠のようによく笑い、深く眠っていらっしやいました。

居心地のいい明るい暖かい室内で、美味しいコーヒーを頂きながら、奥様にその時の会話のやり取りをお話していると、なんで、あの不死身の印象を持つ氏が居ないのかが、分

からなくなります。

「憎しみや争いは不毛だと言うことを、小説や映画で私は学習してきたけれど、秋野さんは大切な者を奪われたら、憎むこと、復讐しようと思うのが当然とおっしゃっていました。それは私にとって、凄く衝撃的な言葉でした。」という、婦人は「秋野はよくそう言っていました。そうして、そういう気持ちを持っていなければ、戦争によって、傷付いた人の上に、停戦やら平和やらは語れるはずも無かったですよ。」

どなたかの追悼文に婦人の言葉として「これからは、秋野はもうずっと側に居てくれる。」と載っていました。私には不死身と思えた氏の命を、婦人はきつと、「生身」のものと感じていたでしょう。それでも、氏の言葉を理解でき共鳴できたが為に、世界中を飛び回る背中の翼を折れず、あるいは、むしろ慈しみ守ってきた・・・、そんな思いが致しました。(手前勝手な思いで叱られそうですが)

あの日、飛行機で隣り合っただけの出会いですが、その

圧倒的な存在感と、後に訪れた喪失感は、私の人生の中に「平和」という言葉を灯して行きました。今後とも、微力ですが、なんらかの形で平和の活動に関わって行きたいと思っております。

最後になりましたが、不躰な訪問に時間を裂いて下さいました奥様、お忙しい中、我儘な願いを叶えて下さいました淺野様と広瀬様、並びに秋野豊ユーラシア基金の皆様、本当にありがとうございました。今後、私のようなもので協力できる事がありましたなら、お手伝いさせて下さい。

2001年1月6日 菊永 良子

「化学反応に際し...それ自身は化学変化を受けず、しかも反応速度を早める...」

秋野先生は僕達に化学変化を起こす。

その思い出もまた。

#### 事務局からのお知らせ

##### 秋野豊賞 出版助成制度創設

このほど秋野豊賞受賞者を対象に、出版助成の制度を開始することが理事会で決定しました。主な内容は下記の通りです。この制度を使って秋野豊賞受賞者がさらなる飛躍をして欲しいと思います。

1. 助成金額は100万円(但しそのなかに、会員分の買い取りと発送料・発送手数料を含む)とする。
2. 対象者は、調査・会計報告書を提出済みの秋野賞受賞者とする。
3. 対象者からの出版助成の申し出に対して、理事会内に事務局長を構成員に含む出版助成選考委員会を設置して検討を加え、最終的に理事会において決定する。
4. 初版分の著者印税(原稿料)については秋野豊ユーラシア基金に寄付することとする。
5. 著者はあとがきなど、適当な箇所に秋野豊ユーラシア基金の出版助成を得ていることを明記する。

〇〇〇

##### 小学校道徳教材に秋野豊氏登場!

この4月から使われている道徳の教材『小学校6年道徳 かがやけみらい』(学校図書株式会社)に秋野豊氏がとりあげられています。これは「人類愛・国際貢献」という単元で、父と娘そして母の対話という形で、いかにタジキスタンへ行く決意をしたか、そこで何を思ったのか、どういう意義があったのか、を考えさせる内容になっています。

〇〇〇

秋野豊ユーラシア基金理事会は小笠原高雪氏に新理事就任を要請し快諾されました。4月1日より理事会メンバーとして活動されています。小笠原氏は現在、山梨学院大学法学部助教授で専門はベトナムを中心とする東南アジアの国際関係です。秋野豊氏とは日本国際問題研究所で一緒の研究会に加わっておられたこともあり、その成果は共著『インドシナをめぐる国際関係』として同研究所より刊行されています。

##### 編集後記

そもそものきっかけは、私が楽天市場というインターネット通販で好物の紅玉ジャムを注文したことでした。そのときは気がつかなかったのですが、品物が届き、お店のパンフをみて、「函館のマルカツ食品? なんだか聞いたことがあるな」と思いました。それでふと秋野豊ユーラシア基金の郵便振替の控えをめぐってみたいところ、ありました、函館市の「マルカツ食品」。秋野豊ユーラシア基金の創設以来、大変お世話になっている会社でした。ここの社長さん(柳沢勝氏)が事件直後から秋野豊ユーラシア基金に関心をお寄せ下さり、「北海道の同郷人として故郷の誇りである秋野氏関連の運動になにか貢献したい」とおっしゃって、寄付金を送ってきて下さっていたのでした。今回、札幌在住の理事・吉岡さんにお願ひして、そのパワー溢れる柳沢社長へのインタビューを依頼したところ、本号に掲載したような特別取材となったわけです。実は柳沢社長はできる範囲のことをしているまでだと、ニュースレターへの掲載については強く辞退されたのですが、事務局としてご無理を言って掲載させていただきました。おいしいものには眼がなかった秋野豊先生を介して、とてもすてきな縁ができました。私たちもこの縁を大切にしたいと思っています。ちなみにおいしい紅玉ジャムを買える楽天市場のURLは次の通りです。http://www.rakuten.co.jp/hakodate/

(事務局 広瀬佳一)

#### 秋野豊ユーラシア基金ニュースレター



第4号 ..... 2001年10月1日  
 発行人 ..... 秋野洋子  
 編集 ..... 秋野豊ユーラシア基金事務局  
 デザイン・制作 ..... NEUES inc.  
 問い合わせ ..... info@akinoyutaka.org  
 ホームページ ..... http://www.akinoyutaka.org